

史料室だより No. 86 東洋英和女学院史料室委員会 発行 2016年5月13日

特集：校歌

校歌の原曲版再刊行について

河野 和雄

東洋英和女学院校歌の原曲版が昨年(2015年)11月、初版から81年ぶりに再び刊行された。この年は奇しくも作曲家山田耕筰の没後50年でもあった。以下はその経緯についての報告である。文中、敬称は誠に不本意ではあるが省略させていただくことをお許しいただきたい。

「東洋英和女学校校歌」の制定

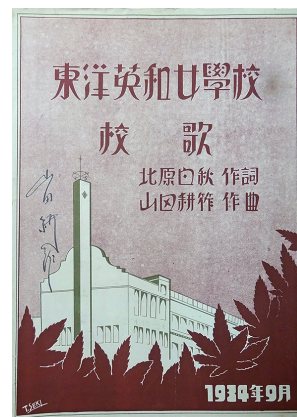
東洋英和女学院校歌は1934(昭和9)年、学院創立五十周年の年に「東洋英和女学校校歌」として制定された。当時の校長、ミス・ハミルトンのもと、北原白秋が作詞、山田耕筰が作曲した校歌は新しく完成したマーガレット・クレイグ記念講堂で行われた創立五十周年記念祝賀式で披露された。制定に関しての経緯は当時の国語科教諭、鶴沼幸が『東洋英和女学院七十年誌』に書いた記事から詳しく知ることができる。学校の標語「敬神奉仕」を敷衍した格調高い歌詞と変化に富んだ流麗なメロディーを持ち、女声三部合唱の形で書かれた芸術的香りの高い校歌は英和生、卒業生、そして英和に連なるすべての人にとっての「誇り」となっている。

「19. Sep. 1934」の日付のある山田耕筰の自筆楽譜は現在、日本近代音楽館(明治学院大学図書館付属)に所蔵されている。『東洋英和女学院120年史』にも掲載されているが、薄い鉛筆書きの繊細な筆致で書かれた譜面のいたるところにあるクレッシェンド、デクレッシェンドなどの細かい強弱指示、微妙なテンポの変化、細かいペダル指示、また数箇所伴奏左手につけられた通常より少し長めのスラー、16小節目にある休符を含んだスラーなどから、作曲者が表情豊かに流れる曲想を求めていたことを読み取ることができる。また18小節に添えられているオssia譜(演奏の困難な場合、部分的に替えてもよい譜)も珍しい。これは「かえでよ かえでの」のg[♯]音(ソ)が高すぎる場合、代わりにe[♯](ミ)でもよいように和音の配置を変えた

楽譜である。多分斉唱でこのように歌われたことはないと思われるが、合唱で歌う場合にはこの音が加わっても差し支えない。

「校歌」の編曲

一昨年(2014年)の夏前、卒業生の鹿島田章子から「現在歌われている校歌は、原曲とかなり違っている」との指摘があった。武蔵野音楽大学の講師も務めた同姉は初版と現在使用されている版を比較し、相違を明らかにした詳細なレポートを学院に提出された。初版を使って歌っていた卒業生の何人かからも「校歌をオリジナルに戻してほしい」との要望が学院に寄せられた。これを受けて、深町正信院長の指示のもとに校歌に関する委員会が編成された。委員長は吾妻國年副院長、委員は武田ゆり中高音音楽科教諭、山内桜子小学部教諭、河野和雄学院オルガニストであった。数回の委員会で、調査、対策について協議がなされ、早速、資料の収集、卒業生への聞き取り調査、東光会の協力によるアンケート(一部の学年のみ)などが始められた。



東洋英和女学校校歌 初版 表紙

2015年4月までに出版された校歌の楽譜は次の4種類である。

- 1 初版 1934年9月(ト長調、Gと略す)
- 2 編曲版(ヘ長調、Fと略す) 1955年中学部入学者より使用
- 3 編曲版(F)「東洋英和の歌」付 1966年
- 4 編曲版(G)「東洋英和の歌」付 1973年

2以降の版に編曲者名、また編曲の経緯についての記載はなかった。しかし学院史料室に移管されたものの未登録であった書類「富岡正男先生の遺された楽譜など」の中から、表紙にM.Tomiokaのサインがある初版譜に赤鉛筆で囲んだ伴奏音の補足（17、19、22、31小節の4箇所）、及び2節、3節の歌詞の楽譜への書き込み、その他速度記号の補足のある楽譜が発見されたことから、この編曲は1952年から1972年まで中学部・高等部に音楽科教諭として在任した富岡正男の手になるものと推測された。



19小節伴奏部

これらの書き込みは、後に出版された楽譜とも違い、その準備段階のものと思われる。さらに卒業生の話などから、1955年頃富岡は中高生の歌いやすさを考慮して原曲のト長調をヘ長調に移調したことが推定されるに至った。

富岡の長女で卒業生、またピアノ科の主任を務めた丸山もと子の話によれば、かつて大学で山田の授業を受けた富岡は、この変更について許可を受けるために山田の自宅を訪ねた。おそろおそろお伺いをたてたところ山田の返事は予想に反して「ああ、いいですよ」のような気軽な調子であったこと、また夫人からも歓待を受けたとの事である。この話は後年、父正男から直接聞いたと丸山は語っている。

本稿ではこのヘ長調版をTF版、後にト長調に戻された編曲版をTG版と呼ぶことにする。移調と同時にいくつかの修正が加えられた。

低音の扱い

移調により低すぎることになったアルトパート、特に冒頭4小節にわたるf（ファ）の保続音は割愛された。（参照 p.3 A）

同様に22小節、「椎よ樫よともに」の部分のa（ラ）の保続音も割愛された。これらの部分ではアルトは原曲のメゾのパートを歌い、メゾはソプラノと共にメロディーをユニゾンで歌うこととなった。この結果、これらの部分は実質2声部となり、原曲のどっしりと安定した響き

は失われるが、反面女声合唱らしい軽やかさを持つこととなった。

その他、8小節6拍目、17小節9拍目、18小節1拍目、27小節1、2拍目の5箇所では、アルトおよびメゾの音を上げて和音は開離配置から密集配置に直された。結果的に女声合唱らしい響きを与える変更とも言える。（参照 B）

和声の変更

18小節の「かえでよ」に相当する箇所の和音がそれぞれ変更された。原曲では3拍目のソプラノとアルト（伴奏パートではソプラノとバス）の経過的な音をはさんで同じ和音であるので、静止した安定感のある和声となっている。

これに対し編曲では、メゾ、アルトパートに動きが与えられ、変化のある、少しおおげさに言えば色彩的な和声となった。（参照 C）

なおこの18小節4拍目の和音変更により伴奏のソプラノとアルトパートに禁則の連続8度が生ずるが、休符を挟んでいるので実質的には連続した感じは緩和されている。

TG版では伴奏18小節4拍目のテノール＜譜例中の*印＞はd'（レ）音でタイで1拍目からつながれている。一見原曲と同じように戻されたように見えるが、TF版からの移調ミスと思われる。d'音では合唱アルトパートとの間では不協和音が生じる。TG版で伴奏する際にはこの音はe'（ミ）に直して演奏すべきである。

伴奏への音の追加

17、19、22の各小節ではフレーズの終わりで歌のパートが音を延ばす時、左手の分散和音を4拍目以降にも追加し、伴奏に感じられる空白感を埋めた。これは山田自身が11小節目で行っている手法を他の場所でも応用したとも言える。（参照 D）

31小節4拍目、最後の主和音に第3音＜TG版ではh'（シ）＞を加えている。これは左手の分散和音の動きが4拍目に最終音を期待することによるのであろう。原曲ではそれが実質的には右手和音の一番低い音g'（ソ）となり、分散和音の最終音と1オクターブの開きがあるため最終音を欠く印象があり、これを補ったものと思われる。（参照 E）

伴奏リズムの装飾

23、24小節の左手バスパート1～3拍目では、原曲の8分音符の同音反復は、付点を付けられ弾んだリズムに装飾されている。（参照 F）

原曲

編曲

5小節6拍目以下（以下5.6～と略す）

A

B

27. 9～

C

17. 9～

D

17. 1～

E

31. 1～

F

22. 12～

このリズムは前述の追加された分散和音（19、22小節）の中にも見られる。

楽譜の変更の推移

これらの変更についても富岡と山田の面談の際に話があったかどうかということについては大変興味あることである。著作権法上、著作者人格権の中の「同一性保持権」により作曲者の意に反した編曲は禁止されている。丸山の話から大変良好であったと思われる両者の関係の中で、専門家であった富岡がこれらの変更の件についても了解を求めたとも十分推測できるが、今となっては確かめる術はない。

著作権法は1899（明治32）年に制定された。その後、時代の要請、技術の発展などを受けて1970年に全面的に改訂された。この改訂は条文数では約3倍、総文字数では10倍以上の大改訂であった。旧法においても「著作者人格権」は規定されていたが、富岡が編曲を行った1955年当時のわが国では、近年とは違いあまりこれを意識する風潮はなかったのではないかと推察される。また編曲の可否については作曲者の寛容さによるところが大きい。山田の場合はどうであったのだろう。しかし仮に山田の了解があったとしても、出版譜には編曲についてのことわりが記載されるべきであったであろう。

その後TF版は、創立80周年（1964年）を記念して富岡により作曲された「東洋英和の歌」と共に合本として出版された。1973年頃、再びト長調に移調され、TG版として2015年にいたるまで版を重ねて使用された。ト長調に戻された理由は不明である。卒業生の中には「持っている譜面はヘ長調であるがト長調で伴奏されていて違和感があった」、「ある年から突然ト長調で伴奏するようにいわれて戸惑った」などの感想を持った者もいたようである。

この際、新たな版が起こされたが、TF版の誤り、12小節3拍目、伴奏バス音e（ミ）のb欠落は訂正されたが、あらたに前述の18小節4

拍目、伴奏テノール音の誤り、および26小節6拍目、右手の和音の上から2番目の音が誤って書かれるという事態が生じた。fis"（ファ#）音は正しくはg"（ソ）である。これは移調、あるいは浄書の際の誤りと考えられる。

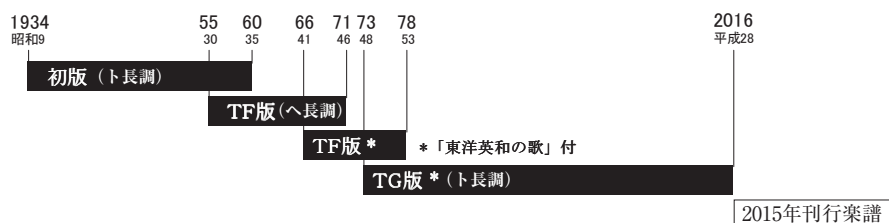
検討委員会はお数回の委員会を重ね、再び自筆楽譜から版を起した原曲版と、60年以上歌われてきた富岡による編曲版を併せて掲載した校歌の楽譜を新たに刊行することを決定した。この際、原曲版は実用的利便性を考慮して旧仮名遣いを現代の仮名遣いに直すことも検討されたが、歴史的価値を尊重してあえてそのままにした。また山田自身の記譜ミス（13小節。すでにTF版で修正済み）、通常つけるべき注意喚起のための変化記号の欠落などを修正した。編曲版は再び編曲当初の調子、ヘ長調に戻した。

編曲の理解

編曲版をどう評価するかは、意見の分かれるところである。もちろん原作は創作物であるが故にその価値に勝るものはない。ましてや一流の作曲家の作品に手を入れることは勇気のいることである。富岡の編曲の第一義的な理由は音域の問題であったのであろう。しかし富岡の編曲は生徒の歌い易さという実目的を超えて、富岡独自の音楽的脚色により、新しい魅力を作り出していると言えるのではないかと推察される。原作の格調高さに対して、より身近な親しみ易さということかも知れない。

愛される曲は後に多様に編曲されることが多い。古典の名曲の多くは後にさまざまな形に編曲されている。ヘンデルの「メサイア」も作曲された時代においても、演奏される場所、演奏者の条件により作曲者自身により様々に編曲された。モーツァルトが彼の時代のオーケストラに合わせて編曲した「モーツァルト版メサイア」も一時は演奏の主流であった。最近では作曲された時代の演奏スタイルを重んじる傾向が強く

校歌楽譜 各版の使用時期



なったが、現在でもなお使用される場合がある。

バッハの作品も極端な場合はジャズにまで編曲されることがある。良し悪しはともかく、その作品にはそれだけ時代やジャンルを超えた普遍性を持っているのである。バッハ自身も晩年、青年時代に作曲した作品、特にオルガン曲について再度推敲し校訂版を出版した。もし山田が晩年に30年前に作曲したこの校歌を再度校訂したとしたらそれは初版と同じ物であっただろうか、あるいは何らかの変更もあったのであろうかと想像の翼は広がる。

結び

現在、学院の諸行事において全員で歌う校歌は高さを考慮してへ長調で歌われることが一般的である。近年は中学部合唱コンクールの中1課題曲、毎年高三が卒業時に録音するCDにもTF版が使われている。これに対して1959年の創立七十五周年記念のレコード以来今日まで何回か行われたレコード、CD録音では編曲版が

ト長調で演奏されているものが多い。興味深いのは1973年にTG版が出版される以前の録音でも編曲版ではあるがト長調で歌われている。今回新楽譜の刊行と共に、中高部合唱部により原曲、編曲両版による校歌の合唱が録音され、幼稚園から大学まで各部にちなんだ歌を加えて、CD「楓よ 楓の園」として刊行された。

筆者は初版を見たことはあったが、今回初めて調性以外にも多くの相違があることを知った。長年英和に在職しながら、このことに気付かなかった不明を恥じるとともに、指摘して下さった卒業生各位に心から感謝するものである。

この二つの版をどのように使用するかは今後の課題であるが、歌う機会の状況に応じて使い分けるのが現実的ではないか。オリジナルの価値を十分に認識した上で、原曲のとおりに歌うのはもちろん、原曲版をへ長調で、あるいは富岡版をト長調で歌うのも許す、そのような柔軟性をもってこの美しい校歌が今後も末永く愛され、歌い続けられてゆくことを願うものである。

これまでに録音された校歌のレコード、CD

年	タ イ ト ル	形 態	備 考
1959	「東洋英和女学院校歌」 創立75周年記念	レコード (E P 盤)	合唱：高等部生徒 伴奏にオルガンが加えられている
1971	「TOYO EIWA JOGAKUIN」 1971年度卒業記念	レコード (E P 盤)	合唱：高等部三年生
1984	「風にそよぐ美しきもの」 創立100周年記念	レコード (L P 盤)	合唱：短期大学聖歌隊
1984	「東洋英和女学院校歌」 創立100周年記念	レコード (E P 盤)	合唱：短期大学聖歌隊
1993	「名門女子高校校歌集」	C D	合唱：高等部生徒 東芝 E M I 制作
1993	「東洋英和女学院校歌」 大学第1回生卒業記念	C D (ミニ)	合唱：高等部生徒 音源は上記東芝版 ハンドベル演奏版も収録
1999 ～ 2002	「東洋英和女学院校歌」 高等部卒業記念	C D (ミニ)	合唱：高等部三年生
2002	「東洋英和女学院校歌」	C D (ミニ)	音源は東芝版
2003 ～ 2016	「風にそよぐうつくしきもの」 高等部卒業記念	C D	合唱：高等部三年生 2004年までト長調、以降へ長調
2005	「東洋英和女学院校歌・ 東洋英和女学院大学歌」	C D (ミニ)	音源は東芝版
2016	「楓よ 楓の園」	C D	校歌合唱：中高部合唱部 原曲版、編曲版を収録

＜追記：あれこれ＞

楽譜通りでない歌い方

「このまど」、「かべ」、「にわ」の傍点の音にフェルマータ（音を延ばす印）はつけられていない。「少しゆっくり」の指示があるが、付点4分音符分延ばしてゆったりと歌われるのが習慣になっている。その方が大きな2拍子の拍子感が崩れず、自然に感じられるからであろうか。

白秋自筆原稿の修正

北原白秋の自筆原稿はインクで書かれているが、最後の「東洋英和、東洋英和」の部分は、3節ともアルファベットでTE TE TE と3回も書かれている。しかしこの部分は鉛筆でうすく消され、日本語で「東洋英和、東洋英和」とこれもうすく直されている。直したのは誰だろう。曲のおさまりは2回が適当で、3回ではおさまりが悪い。耕作からの提案であったのか、それとも白秋みずからの訂正であったのか。

「東の道」の解説

筆者は中高部在任中、毎年高三の音楽テストの一部に、校歌の歌詞の意味について出題した。「日かげ織る」、「光と新たなる」、「にほへよこの良き土」、「玉よりも響かふ愛」など文学的かつ文語調の歌詞は、中1以来何回か意味を教わっているはずである。この類は採点対象としたが、第3節の「東の道」については採点はせずにそれぞれに自由な解釈を書いてもらった。

多かった解釈、珍答。

「東の道」→「東の言葉」→「東の国で話されている言葉」→「英語」の連想から「英語が話されている学校」。確かに日本で見える世界地図では、カナダは日本の右、すなわち東にある。しかし英語は西洋の言葉というのではないか。

「道」という字にひかれて「東の道」は「学校の前の通り」であると地図入りの解答もあった。鳥居坂通りは学校の東ではなく西側にある。

無理もない。筆者も一言で明快な説明はできず、関連ある事柄を羅列し、それぞれに連想を広げてもらうだけであった。

「東」、太陽の上る方向、明るくなる、物事の始まり、真理の源、啓蒙、オリエンテーション、東の博士、「はる」という読み方もある・・・

「道」、字からは人のみち（倫）、読み方からは、神のみ言葉、「はじめに言葉があった」（ヨハネ福音書）、フォーレ作曲「ラシーヌの賛歌」の冒頭の歌詞「至高者と同一なる言葉よ」（キリスト賛歌）、中国語では「道」という字に「言う」という意味もある・・・等々

二名の方の解釈を紹介したい。

・黒川信也元高等部長の解釈

楓の園には、人間が最も大切にしなければならない、「わたしはどのように生きるか」を教えてくださいの神の御言葉が示されている。

・今井亮二中高部国語科教諭の解釈

東洋英和は、互いに相手のことを思いやり、そして想いや時間を共有し、それをみなが一緒に積み重ねていくような、豊かな出会いのある学舎である。

校章の変遷

初版楽譜の裏表紙にある校章は楓の葉の根元の部分が曲がっている。1984年、創立100周年を機に校章の正用定型が制定されたが、それまではさまざまな形の楓マークが種々の出版物などで使われていた。校章の変遷を調査した元大学教授、伊勢紀美子は「史料室だより」に寄せた文を次のように結んでいる。

「当時の校長ハミルトン先生は、合理的で簡潔を好まれると共に鷹揚であって、大筋にOKを出されると、一切責任者に委かせて仔細に及ばずであった方という。根本のカナダ楓が確認されている限りにおいて、その一時的、表層的形状の崩れをも内に抱擁して来た校章の歴史は、ひとりの人格が時の流れ方をも支配し、伝統という言葉に置換えられうるものと教えてくれた。」(No.7 1979年)

校歌の変遷とも関係があるような気がする。

「富」と「冨」

富岡正男の「富」は「冨」が正式な字であるが、学院在職時は「冨」が使われていたことから本稿では「冨」を使用することとした。先生は晩年は「冨」が使われていたようだ。

校歌についての記事など

1935年 「同窓会会報 母校創立五十年記念号」

1954年 鶴沼幸『東洋英和女学院七十年誌』

2013年 今井亮二「論叢」第31号

資料「東洋英和女学院 校歌について」

校歌を主題とした楽曲

1971年 長尾壽晃（元短期大学教授）

東洋英和女学院校歌の主題による変奏曲

197?年 田中友子（卒業生・作曲家）

東洋英和女学院校歌による変奏曲

（学院オルガニスト 元中高部音楽科教諭）